

素晴らしい須走を知りたい！

「素晴らしい隊」養成講座 第3回講座概要

富士山五合目を知る／中級編

必見！隠れた五合目の魅力

■日時

令和2年10月24日（土）9時15分～11時40分

■場所

須走コミュニティセンター

■講師

米山 千晴 東富士山荘 代表



■講義概要

1. 須走口登山道の歴史

—須走口登山道は歴史的に非常に古い。1300年に7合目付近で手鏡のような「懸仏」というものが発掘されている。そのころから登山道があったという歴史的に古い登山道。浅間神社も1200有余年経っており、歴史と重みがある神社。私たち先祖はこの須走において正業をしてきた。須走は標高800mにあり、産業がなかった。夏の富士山2ヶ月で、この時期だけ来られるお客様が非常に多かった。そのお客様の宿泊、お食事、お土産など色んな事で携わっていた。富士山に関わっていた方がほとんどの部落。当時は約1ヶ月ちょっとで一年分を稼ぐと言われた。それを過ぎると、この地は何にもない。秋には山へ入り薪を切る。薪を切って炭にしたり、薪木にしたりして出し、生業として脈々と続いてきた。春になると山椒がたくさん採れたので、摘んで醤油で煮て保存食としたり、販売する方もいた。近年になると高齢の方が増え、山椒はとげがあって痛いということで、採る方が少なくなった。須走は、富士山と共に生きて来た。昭和27年にこの地に富士学校が進出して、須走の様相は一変した。人口も100軒弱の1,000人も満たない小さい部落が、29年開校により約4,000～5,000人の大きい部落になった。それにより富士山のあり方も変わった。昭和36年になると、須走口登山道は栄華を極めており、8万人の登山者がいた。しかし、昭和36年を過ぎると山梨県の県営有料道路「富士スバルライン」が開通した。高度成長期で、余暇を利用して登山者の方が増えた。昭和39年になると、富士スバルラインには年間12万人位の方が来た。昭和42年に富士山スカイライン、富士宮口が開通

したことにより、須走口は年間 3,000 人というほとんどお客さんが来ない時代がしばらく続いた。その中で、地元の方は努力し、須走を世に出そうと考え始める。須走の浅間神社から続く「ふじあざみライン」の舗装工事に着手する。昭和 62 年に全線開通した。そのことにより約 20 年位はさびれた登山道だったが、ようやく持ち直し、一時は 6~7 万人登山者が来るような登山道になった。地元の旅館の方々、それに付随する色んな方々の努力があったと思う。そんな時代背景において、近年は 70% くらいはインバウンドと呼ばれる外国のお客さんが来るようになった。今年はコロナで来年以降、富士山に来る方がどの位になるのか見当もつかない。須走の魅力を知っていただき、たくさんのお客さんにこの地を訪れていただき、須走の魅力を再発見していただきたい。

2. 須走口五合目について

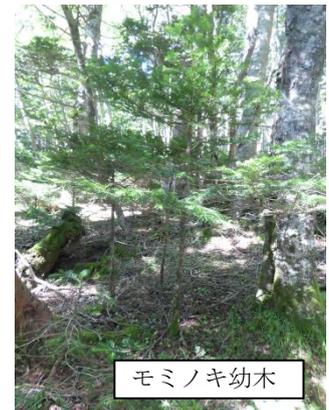
- ドローンの映像。2800m の所。森林限界が高いというのが須走口の特徴。今、カラマツの林が黄金色に輝いている。
- 宝永の大噴火により、須走の町は壊滅状態になったが、5 合目から先においては 50cm 位しか降灰はかかっていないので消滅していない森がある。
- 森の入口、二次植生。一次植生はモミノキ、カラマツの林。ここは、昭和 33 年に伐採している。元来、須走口のスタート地点である 1350m の馬返しから狩休までバス道路が伸びたのは昭和 31~32 年だった。それから数年して、バス道路を 2400m の高さ(今の長田山荘)まで上に延伸させようという計画があり、古御嶽神社の横を一回伐採した。しかし、古御嶽神社の所に岩脈という溶岩の層があった。昭和 30 年代は砕く機械がないので、しばらく止めておいて将来的にその先の登山道を作ることに変更になった。ちょうど昭和 33 年に今のところに小屋を建てた。もし当時、重機があれば富士山スカイライン(2400m)より 20m 高い所に五合目をもっていった。そののち昭和 42 年に富士山スカイラインが県の有料道路として出来た。須走口が当時 2400m まで上がっていたら、小富士は忘れられて、人も行かないような密集した林の中になっていたのではないかと思う。
- 今年の特徴は、7 月の長雨、雪が多く、湿った雪が重たかったせいで植物の植生が悪い。フウチソウというイネ科の植物がいつもなら 50cm 位になるのが 20 cm。6 月になれば花盛りのイチヨウラン、カモメランがほとんど植生としては出てきていない。季節の移ろいに変化していると思う。こんなに植物が出ない、花が咲かない年は初めて。
- ダケカンバ(岳樺)。今は、全部葉を落としてしている。ちょうど 8 月が緑豊かな時。
- 小富士入口の階段。植生は二次植生。緑の中を上る、緑の中を山に入るとというのが須走口の特徴。
- 地表はモミノキの幼木に覆われている。たくさん種子を落として発芽するが、1 万本の中で生きていくのが 1%。その位しか育たない環境の厳しい所。そのためにたくさんの種を落として発芽を促進させて競い合い、1%の限られたものしか生えない。



フウチソウ



ダケカンバ



モミノキ幼木

一木の自然治癒：重機が入り、傷ついた木。植生が復元、治癒している。木々も防衛本能を持っている。生きていくすべを身につけたもの。モミノキの幼木が巨木になるのは数本。

—まだ植生が極相林になっていない。途中、なめ状になった沢。沢は小富士の遊歩道の手前のところ。

2018年の雪崩により、上流が20m位、深く浸食された沢状になり広がった。スラッシュ雪崩のスタ

ート地点が2600m。2600m地点の状態は、約15年～20年製のカラマツが雪崩により倒され、狭い沢に入り時速70

km以上のスピードで下りて行った。河床から2m70cmのところまで雪崩が上がったというのが観測されている。ここ

になぜ注目したかという、この手前に古御嶽神社がある。須走口登山道の守護神だが、昔の文献を見ると約1町3

反という非常に大きい面積を有する神社だった。古御嶽神社からここはすべて神社敷だった。この先に行場と呼ばれる

遺構があり、そのすぐ下に滝がある。私が子供の頃は水が流れていた。この水で手を洗い、身を清めた。水垢離場があった。2018年のスラッシュ雪崩によりかけらもなく飛んでしまっている。



—人間が石を積んだもの。今から約11年ちょっと前に、800万の調査費で測量した。ここは、大きい遺構であることが

分かった。一番下が、当時の行場の炊事場である。ここから「くらわんか」という室町時代の湯呑みが出土した。こ

こで祭事が行われたという裏付けができる。石組から最上部まで約70mある。何か所か石組がある。左側に人の手で

作られた階段がある。一番上の平場は横幅約40m、奥行が15～20m。この広場に何かの建物、祭壇を設け、遥拝をす

る場所があった。当時、江戸時代はこの植生は進んでいなかったのも木はなく、ここから山頂を仰ぎ見て遥拝をしていたと思う。富士山に登れるのは7、8月の2ヶ月間。それ以外の時は11月くら

いまではこの遥拝所に来ていたのではないか。この場所は須走口の古御嶽神社横にある富士山信仰の遺構。この下にある御室浅間神社に中宮役所があり、ここから小富士へ向かい最後にここで遥

拝をしていたのではないか。



—平場という斜面、玄武岩層のスコリアという層がある。けもの道を我々が拝借させていただいて森の中に入る。カラマツを中心とした一次植生、カラマツは先駆植物。荒地に

最初に根付くのがカラマツ。スコリアと呼ばれる酸性土壌の環境が厳しい所でも植生が育ちやすい。岩陰に点在して

いくと、数十年するとまっすぐ伸びる植生になっていく。カラマツの一次植生から中に入ると極相林と呼ばれるモミの木、一次植生の第二段階に移行している。この地では

水平的な分布がよく見られる。先ほどと林相が急に変わった。木々は変わらない。モミノキ、カラマツ、コメツガの木が主流だが、地衣類と呼ばれる苔が出現してくる。苔が出るのは古い森だとい

うのが分かる。行場より手前は幾多の雪崩により焼失し、それが復元し、ということを繰り返している。これから先が巨木、200年位経っている。この地は雪崩に合っていないという事が分かる。



—これはシラビソ、モミだが、悲惨な目に合っている。ここは尾根になっていて、少し高いので上空を通る風が非常に強い。柔らかい材なので、このようになる。昔はモミノキで棺桶を作った。柔らかいから加工しやすい。



木の墓場、倒木から凍裂

—歩いていった場所から 10m も離れるとこのように林相が変わ

る。モミ、シラビソ、オオシラビソの極相林。この森の入口は植生が小さい。ここがかなり大きい木が倒れて二次植生、三次植生に変わっていることが分かる。木が割れている、凍裂という現象。モミノキの類は材質が柔らかい、加工しやすい。5 合目の高さだと冬になると気温がマイナス 25 度以下になることが多々ある。その時に木の中は水分なので、中の水分が凍結、膨張し裂けてしまう。日本の中部山岳、北アルプスを含めて 3,000m 近い山にならないとこの現象は見られない。裂けるということは、木そのもの自体に傷が入る。湿った雪で、枝に雪が載って重みがかかる。そこへ風速 20m 以上の風が吹くときこういう状態になる。凍裂によって傷を受け、そこに冬の雪の重みがかかり、風が吹くと木が折れる。いわゆる木の墓場という場所。尾根の風通しのいい寒い場所で、凍裂、木が倒れるということが起こる。幾百本の木が同じ方向を向いて倒れている。木の墓場と呼ばれるような惨状を目にする。



—しかし凍裂することにより木が倒れる。倒れることにより次の世代が育まれる。凍裂で空間ができ、その空間の地表に太陽が入る。太陽が入ることにより植物が光合成できる。モミノキの幼木、実生が復活する。たくさんの種を落とし、その中で気象状況を考えて 1% の植生しか育たない。空いた空間は非常に大事。次の植生を育むということになる。富士山という所は私どもに色んなことを教えてくれる。



木の限界、二次植生

—コメツガの木。カラマツなどの極相林になる。この先は巨木の域に入る。ちょうど尾根なので、木々の墓場と呼ばれるところ。カラマツは先駆植物。先駆植物も長い年月をかけて 300 年位で寿命を終える。寿命を終えた木は、枯れても 30~40 年は直立して立っている。中が空になり、スカスカになった状態で倒れるのを待つ。この木は、ほとんど枯れかけているがまだ生きている。木のうろの所。そこに次の植生、ナナカマドが木を親木として育つ。ミソと呼ばれるスカスカになったところから養分、水分を吸って生きていく。宿り木と呼ばれる状態。厳しい環境の中で植物たちは生きる術を身につけた。



地層、溶岩

—溶岩棚と呼ぶ場所。この木は北風、風衝で倒木している。唯一富士山から流れ出た溶岩が凝固した形

が残っている場所。1回の溶岩の流出は、かなりの厚み。山頂直下 3200m の須走の見晴館付近の寄生火山、側火山から流れ出した溶岩の層。1層が 1m50cm 位。露出している所では 4 層。一番低い所は、東大の地質学研究所の方々に調査してもらったところ、4000 年以上前のものだと分かった。玄武岩、最初に小石や樹木などの不純物を含んで流れ出て来たので固くない溶岩。断面が残っているのは恐らく流れた所が昔は沢、溪谷だったところに溶岩が流れてきて小富士があり固まったから。幅広い火山灰の層が 3200 年位前の富士山の山体の大崩壊によって流れ下ったので、固いものだけの残り、深い V 字溪谷が逆にできた。御殿場泥流と時期が前後するが、御殿場泥流は富士山直下から流れ下り御殿場地区をほとんど埋め尽くしたもの。位置的に溶岩棚の所はスタート地点が静岡県と山梨県の境なので、左の山中湖付近の方へ流れている。御殿場泥流は右へ流れた。学術的にも面白い場所。溶岩についているのは地衣類。動物の毛を触っているように固い。これも須走口の財産だと思う。



- 地衣類についている植生。キンレイカ。小さい花。富士山は植生が短い期間でどんどん咲いていく。今年はキンレイカがほとんど見られなかった。秋のキンソウと並ぶ黄色い代表的な花。
- トリアシショウマ。日陰のジメジメしたところで育つ。鳥の足に似ているので、トリアシショウマ。



キンレイカ



トリアシショウマ

- 溶岩棚を抜けたところ。尾根があるので溶岩がここで止められたという事が分かる。
- 小富士。1979m の小富士の山頂。この日は朝の天気良かったが、駿河湾から湿った空気が上昇気流に乗り富士山は日中は雲がかかってくる。小富士から見たロケーション。こちらが山梨県へ向かう方。このきわを昔は山中湖登山道から登山者が登ってくることもあった。八ヶ岳、もう少し気温が下がるとこの奥に白馬岳が良く見える。富士吉田の町、三つ峠、甲武信岳を含めた山体。右の方へ行くと、山中湖。八王子の方向。条件が良ければスカイツリーが見える。冬でないと見えない。右側、丹沢の山々。静岡県の方は雲に覆われてきた。三国の山稜によって湿った空気が入ってきたのが小山町を含めた御殿場地区に雲がたまりやすい。しかし標高 900m の山中湖を主体とした 1350m の三国山稜から先は日照がものすごくいい。須走地区を含めた御殿場地区は年間 65%位の日照率。山梨県は日照率 78%以上でほとんど晴れている。ここから見るとよく分かる。
- こちらが東富士演習場、こちらが北富士演習場。子供の頃の思い出だが、進駐軍と呼ばれる米軍が御殿場地区に進駐してきてキャンプ富士という営舎地区を作った。赤塚と呼ばれる須山の方からオネストジョンという 30 km 以上飛ばせる大砲を撃って着弾させたのが梨ヶ原。当時は米軍が須山から籠坂越えに砲弾を飛ばしてこちらに落とした。今は国道を越えることはできない。

一富士吉田市の全容。小富士に行くと、地理的なものが良く分かる。北口本宮富士浅間神社を中心とした門前町。富士山を正面に見るような形で町づくりが形成された。須走も大体同じ。本通をみると神社の向こうは富士山。富士山崇拜をする形を取った町づくり。下吉田から上吉田に向けて浅間さんまでまっすぐ伸びている。



富士吉田市

一小富士から見たドローン映像。宝永山、愛鷹山。二子山。伊豆大島、箱根の山々。湘南海岸。金時山。三浦半島、房総半島。横浜。丹沢の山々。山中湖。スカイツリー。八ヶ岳。富士山の原生林、本当の樹海。富士山須走口の植生は非常に高いのは、岩脈で覆われて安定しているということ。植生が育たない火山の荒れ地、火山高原と呼ばれ砂漠。安定していることで植生が根付き、地衣類から原生林となっていくという事が須走口の特徴。高い植生があるのは須走口だけ。植物、野鳥、動物、キノコが多い。

一五葉松からハイマツへ。小富士付近の松の植生。富士山には珍しい五葉松。富士山はカラマツ主体の林だが、鳥が運んできたものだと思う。五葉松が高山に行くと進化したものがハイマツ。元の遺伝子を持っているのは五葉松。富士山も五葉松が現れてきたという事は、500年、1000年後にはこういう風な植生に変わっていく。カラマツの植生からモミ類のシラビソ、オオシラビソ、オオツガの極相林になり、進化してこの木に覆われてくる。南アルプス、北アルプスに行くとハイマツと呼ばれる氷河期の生き残りの地層。富士山は火山としては幼年期。富士山頂火口から噴火が止まったのは今から2800年前。それ以降は側火山、寄生火山からの噴火で、まだ若い火山。この植生を見ると、最終段階に入ってきていることが分かる。



五葉松

一三等三角点。ここが基準となる。ここを中心にすべての高さ、地図を作るための測定のポイントとなる。三角点は現存している。防衛省と書いてある。演習場区域だという杭がある。小富士は約50年以上前、冬季国体の滑降、大回転の会場だった。子供の頃はこの下までワイヤーリフトがあった。今でもこの下に平場があるが、リフト乗り場。富士急行のバスがグランドキャニオンの上部の所までお客さんを送迎した。間口8間、奥行4間の建物があり、ここで支度をしてスキーに興じた。



一バイクのトレース、バイクの痕跡。そこに水が入り沢になっていく。オフロードバイクはかなり砂を掘削していく。ここに最近の集中豪雨があると溪谷ができていく。バイクは北富士演習場から入ってくる。静岡県の方からは入れないようにしてある。神奈川県の小富士林道から入ってくる。植生を荒らして、ガリーと呼ばれる浸食した沢ができてくる。これをどうにか止めなければならぬが、県も人材不足という事で手立ては何もしてくれない。三等三角点の所は1904m、我々が行く小富士の遊歩道の所が1979m。標高的には下がっている。地図で1904mと表示があるのは下の小富士と呼ばれる三等三角点



の位置が小富士のピークになっている。

—7年前につけた境。私と数人の職員と GPS でこの場所を探した。県境だと呼ばれているところ。グーグル地図で見ると、県境は富士山の真半分の所。そうすると須走口の山小屋は全部山梨県側になる。ということで昔から山梨県と係争が続いている。先ほどの赤い杭が現在の国土地理院の地図で県境が収束しているところ。杭を GPS でとらえてこの位置を割り出した。ここから北富士演習場に向けて、現在の県境がある。ここからなぜ県境がなくな



ったという、静岡県と山梨県が絶えず言い争いをしていたから。先ほどの小富士の映像の所に昭和の初め、山梨県の山中湖村で山小屋を建てて営業を始めた。何の断りもないという事で、須走口と揉めて、営業を止めさせ、建物を解体させたと聞いている。山頂から赤い杭までは県境を設けない、干渉地域という事で裁判所の決定が出された。その前に山梨県が小富士山頂の 1904m の国土地理院の三等三角点から山頂に向けて森林限界まで木を伐採した。これが大揉めになった。そのような係争をずっと繰り返してきた。7年前、世界文化遺産に登録されたとき、静岡県が「富士山世界遺産小富士」と御影石で 300 万かけて作った。重さ 270 kg。これを県の委託を受けた建設会社の方が 6 人がかりで担いで小富士へ石柱を建てたら、わずか 2 か月で撤去。山梨県から、「静岡県と書いてあるのはまかりならない」ということで、抜いて小富士歩道の途中の岩の下に置いてある。昔から係争地だった。今でも何かをするのは大変。小富士遊歩道に 4,600 万の予算を付けていただいて、木道にする予定で、調査費で測量してあった。今年工事をする予定だったが、コロナ禍で経費を取れないという事で中断。来年以降随時始めるという事で町長の了解を取ってある。2 週間位前、小山町商工観光課の職員が森林管理署の職員と小富士遊歩道を貸し付けで小山町が管理したいという話になり、その折に山梨県が来て GPS で位置的なものを確認した。グーグルの地図が使われて、今の小富士よりはるかこっちが境だと主張したらしい。日本国民の持ち物だという感覚でいけば、開発されなくて済む。県境を決めてしまうと乱開発されるので、小富士は今のまま保ってほしいと思う。我々が主張する境は、この杭から山頂の白山岳にかけて、山梨県は小富士の頭から山頂真ん中だという主張。両県の主張はかけ離れている。

—明月草、タデ科、イタドリの仲間。四輪駆動車がかなり来るようになり、荒らされガリーができ、今ではバイクが入る。この沢はこんなに深くなかった、10m 以上ある。40 年くらい前まではなだらかな形状の沢だった。地層が出て、ミニグラウンドキャニオンが出てきた。この先、集中豪雨でもっと深くなっていくと思う。一度傷んで溝ができた所は、復元が厳しい。我々の手が施せないで放っておくしかないが、そうするとどんどん深くなる。そして流れ出て堆積したものが、数十年に一度のスラッシュ雪崩で下に流される。



—火山高原から原生林に入っていく。テンニンソウ、ここ 30 年位で富士山を支配している。林床をテンニンソウがほとんど埋め尽くしている。非常に強いので、富士山の植生を支配すると思う。1500m 付近、小さい灌木。なぜ小さいかということ、生活の糧であった、明治から大正にかけての須走の産業。薪炭材として切りつくしたところ。その中に御神木と呼ばれる巨木が須走で唯一残っているところが

この付近。林業やっている方々は大きい木は神様がいるという事で残しておいた。この巨木はミズナラの木。人間6人で囲める天空にそびえる大きな木。樹齢370年位のかかなり樹齢の長い木。その周りには樹齢300年近いモミの木が凍裂をして倒れている。宝永の大噴火の降灰が1m位かぶっているが、ぎりぎりで生き残った木。巨木群はこことその下に点在している。左側に寄っていくと、樹齢400年以上のモミの木が3本ある。巨木に対しては、先祖さんは畏敬の念があり、酒をあげて守った。幼木のミズナラ、ブナの木は切って下ろして、生業として須走の先住民は生きてきた。



一ナラ枯れ。関西の方から侵入してきて、昨年今年で箱根を越えた。小山町の森林の25%くらいがナラ枯れ。虫が木の中に入って枯らしていく。富士山の巨木のすぐ下までナラ枯れが来ている。巨木にしか入らないので、富士山のミズナラの巨木も風前の灯かもしれない。1500mの所までナラ枯れが進んでいるということを知っておいていただきたい。自然にはかなわないので、世代交代になるが、森の神様と呼ばれる巨木を大事にしていけないといけないと痛切に感じる。



一巨木は落雷を受けやすい。落雷を受けて割れているが生きている。木の生命力はすごい。雷の直撃を受けるとカラマツは粉々になるが、このミズナラの木はたまたま二本立ちになって生きている。

一地層が露出している。ミニグランドキャニオン。一番高い所が宝永の噴火3m以上ある。300~400m奥に行くと、降灰物がない。噴火の歴史を物語る。すべてスコリアと呼ばれる層。一回の噴火、白いものがあるが次の噴火の前兆、スコリアの黒々としたもの、赤茶けたものがあり、収束して次の層、軽石の層、黒い層と噴火の歴史を見ることができる。ここも数十年すると大渓谷になるのではないかと思っている。



一鹿の頭の骨。鹿、猪は県の許可をもらって猟友会の方が管理捕獲している。2万頭近くの増えすぎた鹿がいたが激減した。須走の裏の立山、道の駅の上あたりはまだかなりいる。車との事故は減っている。昨年一年間で鹿が1700頭、猪が600頭管理捕獲されている。鹿もある程度自然環境の中に必要だが、それ度を超すと食害、木々を食い荒らす、下草を全部食べるなどの弊害が出てくる。植生が豊かで木々がしっかりしていることで、森の健全さが失われない。森の健全さが失われないという事は、安定した土壌である、災害に強い森ということであり、ある程度の管理捕獲も仕方ないことだと思う。

一2018年に40万立方メートルの大土石流が起きた。8基の堰堤すべてが流され、二人の尊い命が奪われた。現在、高性能堰堤。中は現場発生土にセメントを混ぜている。外は高性能型枠。色々な方のご尽力を得て、馬返しに5基の大きいダムができた。来年の3月にあと3基できる。昔は貯砂ダムと言って、ダムで後ろに砂を溜めた。溜めた砂を取って次のものを下流に流さない。今は法律ができて取らない、ダムの後ろは安定した傾斜で、この上を段だんだんにして流速を弱めることになった。数十年後にはこれを乗り越えてくると思う。国の直轄事業、馬返しから下は県の事業。今年2億8千万で大型のダムを作る。全部で16基位ダムが入る。こういうのができなのが富士山の本来の形だが、

地球温暖化により、異常な出水、大土石流が起こる。今演習場で、ドローンを使った計測をしている。約 10 年前の標高をベースに堆積物の標高を取っているのので、どのくらい溜まったか分かる。現在、演習場の中に 38 万立方キロが堆積されている。2018 年の豪雨のスラッシュ雪崩では道の駅の所まで大土石流が迫っていた。あと 1 時間位雨が降ったら、町まで来た。自然構築物は相反するが、我々の生命・財産を守るには仕方ないと感じている。地球温暖化を遅らせなければ、富士山は山体の大崩壊を繰り返していく。数年後にはまた上から流れ出たものが下の方までくる可能性がある。我々が守っていかなければならない富士山をもう少し皆さんと考えていかなければならない時期かもしれない。永久凍土の凍った層がもうない。山体が崩れるということも懸念材料の一つ。



一度は行ってほしいまぼろしの滝は、雪がある事、雪を解かず気温が上昇した時、流れ出たものを流すトヨの役目をする溶岩がある事。この 3 つの条件がそろわないと出現しない。まぼろしの滝は約 800m 流れる。溶岩流の跡が浸食されてトヨの状態を作る。滝つぼの下 100m 先に行くと水は消失する。水は流れず、地中に浸透してしまう。しみ込んだ水は奥深くしみ込み、溶岩の堅い層、柔らかい層の間を縫って 20 年 30 年かける。黄瀬川水系までいくと 70 年 80 年という長い年月をかけて流れる。水の旅たちが始まる。長い年月をかける物語があるのを知っていただければ見るのも面白いと思う。自然豊かな須走口を須走地域の活性化を含めながら富士山を知り、学び、須走の町がどう形成されていったかを知り、地域を理解していくべきではないかと思う。今、富士山は危機的な状況である。それは山体に永久凍土が消失し、いつでも崩れやすい状態だから。この後の気象状況によっては大変なことになる。永久凍土は復活しないが、皆さん一人一人の認識により、気温を 2、3 度下げることができる。この地域、御殿場、裾野全体の方々の知恵を拝借しながら地球温暖化にもう少し本気で取り組んで、富士山の雄姿をいつまでも保ち、次の世代に残す努力をすべきだと思う。

3. 質疑応答

ーQ. 小富士のあたりはなんで樹木が生えないのか？

A. 気象条件が厳しい。尾根筋の頭は風が当たる。植生は風を遮る、石がある。そこに活着するにはある程度の水分が必要という事で先駆植物の苔が最初に定着する。苔が定着するとカラマツの種が生える。このストーリーは壮大なストーリー。宝永の大噴火で御殿場地区は 300 年経ってもいまだに植生が復元していない。絶えず風にさらされ、直射日光にさらされ、植生が出始めてもダメ。現地に行くと分かるが、少しずつでも植生が復元している。小さいものが少しずつ出ている。あのまま伸びると 200 年、300 年後には濃い緑になると思う。厳しい状況の中で復元は難しい。スコリアの特徴で、凍って土が堆積が増えて解けると中がスカスカになり、スコリアの山は動くと言われる。須走の山も植林する前は、御殿場口の火山高原と同じ状態。人が手を入れながら、少しずつでも植えては枯れ、植えては枯れと長い年月を経て活着していった。小富士は冬はマイナス 25℃、夏は直射日光が当たるので 40、50℃になり、過酷な環境。

ーQ. 須走口のバス停に「小富士講所有地」とあるが、小富士と関係はある？

A. 小室教。富士山信仰が最初に始まったのが、扶桑教、実行教、富士教。ここから枝分かれしていった色んな宗教ができた。扶桑教の分かれの中に小室さんが須走に在住していて、宗教法人を作った。

今でも石柱があるが家はボロボロ。継承する方がいらっしやらない。須走の上の所に小室さんのお墓もあり、扶桑教の小富士を信仰していたという事が墓石にも書かれている。五合目の祠にも扶桑教の小富士を特に信仰されていた方のお名前も記載されている。大申学さんがそのお世話をしていた名残も五合目から小富士に行く間の道に小富士参道という参道を示す石碑が建てられているが、そこにも先ほどの方々のお名前が書かれている。小富士に行っていただくと、小富士を信仰されていた方々がいらっしやったというのが分かる。小富士も昔の資料の一つに禅をされる方の小禅定で修行する場という風なものが記載されている屏風がある。

—Q. 小富士は側火山によって出現したのか、自然の風が舞って砂で盛り上がったのか？

A. 諸説ある。富士山は 40 万年前に小御岳火山、10 万年前の古富士火山、1 万年前の新富士火山の三層構造。古い富士山の一部であるのではないかと言う方もいらっしやれば、側火山と言う説もある。だとすれば火口はどこにあるのか。未だに証明されていない。おそらく今の富士山がのっかっている土台だという説が強いと聞いている。

—Q. 浅間神社ができたのが 802 年。箱根を右から見た時に富士山の東側から噴火をして、それを鎮めるために浅間神社ができた。ミステリーからすると 802 年に小富士ができた時に浅間神社ができたというストーリーだと説明しやすい。

A. 火口があればいいがそれもない。原生林の中のどこかにあると思う。諸説あるので、自分の思っているストーリーで説明すればいいと思う。

—Q. 小富士の所だけなぜ樹木が生えないのか？

A. 気象状況が厳しい、直射日光が強い、植生が復元しようにもなかなか復元できない。でも周りから少しずつ上がってきている。私が 10 歳くらいの時はもっと下だった。尾根にあることによって気象条件が厳しい。

—Q. ナラ枯れとは別に笹枯れがある。あれは何かご存知？

A. 富士山も笹枯れがほとんど。水ヶ塚公園の付近は 20 年位前は笹が多くて入れなかったが、今はほとんど枯れている。須走口も馬返しの上もほとんど枯れている。笹は 60 年サイクルでいったん枯れてまた復元する。今ちょうどサイクルの最中だと思う。

—Q. 植物の登山。森林限界が上がっていることが良く言われるが、中腹の植生で何か根拠がある？

A. 植生に関しては、ここ 20 年で植物の登山がかなり上がっている。森林限界が 2800m。40、50 年前は瀬戸館の上 2700m。100m 位近く植生が伸びている。自然環境が厳しいのに、なぜ活着するかと言うと、須走口は尾根がずっと岩脈なので、そこに植生が伸びていつている。動かないということ。そこに活着しやすい、苔が付きやすい。そこに樹木が生えていく。小富士は岩がないので、絶えず風雪にさらされて動く。動くことにより植生が遅れる。